

I-188 震災時のラジオ報道

—ロマリェタ地震の実例を追う—

東京大学生産技術研究所 正会員 片山 恒雄

【まえがき】1989年10月17日夕方5時5分過ぎ、サンフランシスコ市の南、サンタクルーズ山中にM7.1のロマリェタ地震が発生した。地震後の停電のため、被災地区の人たちはテレビを見ることができず、ラジオが唯一の情報源となった。筆者は、この地震の東京都調査団に同行取材したラジオ放送関係者から、サンフランシスコ湾岸地域のある放送局（CBS系のKCBS局）の地震直後から約2時間の放送テープを手に入れることができた。湾岸地域には、50局ものラジオ局があるという。たった1つのラジオ局の放送から、すべてを類推するのはあまりに乱暴かもしれないが、1つとはいえきわめて興味ある実例であることに違いはない。

【地震発生からの30分】強い揺れが球場を襲ったとき、KCBS局は、ワールドシリーズの中継放送のため、キャンドルスティック球場のようすを伝えていた。「KCBSニュース、5時7分です」と言ったところで電波が中断する。球場の電気が切れたのである。約1分の中断の後、女性キャスターの「KCBSニュース、5時8分です」という声でスタジオからの放送が開始された。地震の発生から2分半後である。

サンフランシスコ湾に面する41階ビルの32階にあるKCBS局スタジオは、揺れで大混乱。スタジオを代え、自家発電装置によって放送を始めた。「KCBSのニュースラインに何人かの人がつながっている」と言って、ジャンはKCBS局のスタッフ3人から電話レポートを受ける。ひとりは湾の対岸のやや北から「横揺れが10秒から15秒ほど続いた」と冷静にレポートする。市内の2人は「揺れは激しかった」「すごい地震だった」と電話してくる。しかし、いずれも、家が倒れたり、けが人が出ているという感じはない。KCBSのアラメダ郡の局長は「とても恐かった。今からカリフォルニア大学に地震の規模を聞きに行く」と伝える。

地震発生から約8分、どの場所からの情報も壊滅という印象は与えない。

バートの指令室から電話が入る。「全線がストップしている。湾の下のトンネルにいた電車は補助バッテリーで動きだしたので、まもなく外に出せる」。地震発生からおよそ11分たった。

サンフランシスコより南からの最初の報告が、サンタクララ郡局の記者から入る。「揺れがあまり激しいので、死ぬかと思った。この建物に被害がないなんて信じられない」

この後、サンフランシスコ市、オークランド市の周辺やさらに北方からの情報が続くが、地震発生から20分以上たつのに、地震の大きさも震源の位置もわからない。ヘリからのレポートが入った。「パークレーでかなり大規模な火事が起こっている」。最初の明らかな被害の報告である。サンタクララ郡の鉄道の駅から「鉄道は止まっている。町中は大混乱のようだ。建物が倒れて舞い上がったほこりが、火事と間違えるほどだった」。さきほどのサンタクララ郡局の報告と合わせると、被害は南にいくほどひどいらしい。

地震後に放送するためのテープが初めて流される。地震の発生から30分たっている。「KCBS放送の地震時緊急安全のためのメッセージです。停電になったら、懐中電灯しか使わないようにしてください。電気をつけたり消したりすると、洩れているガスに引火することがあります……ラジオをつけたままにして、地震に関するこれからの情報に注意してください」

【2階建て高速道路の崩壊】スタジオからの「5時35分です」に続いて、ヘリコプターから、この地震の最悪の被害が飛び込んでくる。「880号線サイプレス区間の2階建て高速道路がめっちゃめっちゃに壊れている。驚くべき光景だ。高速道路の上段が下段の上に崩れ落ちたようだが、その間に車が何台挟まっているのかわからない。緊急車両が数台見える。ひどい交通渋滞で、救援の車は容易に現場に近づけそうもない」

「州の緊急対策局の発表によれば、マグニチュード6.9、震央はホリスター」。地震発生から35分たった。

サクラメントにある州の緊急対策局によれば「サンベニート郡で建物被害が大きいらしい」。キャスターの「サイプレス高架橋が崩壊を知っているか。救援はどうなっているか」という問いかけに「救援はアラメダ郡とオークランド市の問題だ。聴取者の皆さん、不用な電話をかけないようにお願いしたい」とかなりぶっきらぼうな答えがかえってくる。「サンフランシスコ市の消防局職員は、全員消防署に集まってほしい」。市からの最初の公的なメッセージである。地震が起こってから約45分たっている。

10分ほど前にサイプレス高架橋の被害をレポートしてきたヘリコプターから「いまトレジャー島の上空にいる。ベイブリッジの2階部分が30フィートほど1階に落ちている」という新しいニュースが伝えられる。地震発生から50分、サンベニート郡の郡庁と連絡がつくが、ほとんど情報は集まっていないようだ。

【地震発生から1時間以降】約1時間の放送の後、発電機の燃料パイプが詰まったため、再び20分近く放送が中断した。6時19分頃、KCBS局が入っているビルの非常用発電機に切り替えて放送が再開される。

マリーナ地区からのニュースが入る。「ベイ通り沿いで建物が炎上中。3、4階の建物がいくつか崩壊し、車が下敷になっている。道に割れ目が走り、ガス臭い」。地震発生から1時間半。880号線の崩壊、ベイブリッジの1スパン分の落下、マリーナ地区の火災と建物倒壊という、サンフランシスコ・オークランド両市における3つの大被害が出そろった。マリーナ地区から情報が入るのが、こんなに遅いのは驚きである。

この頃になると、たんなる被害報告だけではなく、生活関連情報がだんだん増えてくる。「ガスと電気がストップしている。不用不急の電話は使わない」「サンフランシスコ空港は閉鎖されている。到着便はすべてよその空港へ回している。滑走路に異常はないが、空港は少なくとも今日中は閉鎖」「アラメダ、コントラコストラ両郡の需要家80万のうち16万が停電中。PG & E社の職員はオークランドの事務所に出勤してほしい。ガスより電気の影響のほうが深刻だが、明朝までには復旧できる見通し。ガスも電気も使えるところ」は使ってかまわない。ガスの臭いがしないかぎり、元栓は閉めないように。元栓を閉めると復旧に手間どる」「州は必要な援助をする用意がある。州の国防軍が召集された」「安全確認のためサンマテオ橋は閉鎖中、ゴールデン・ゲート橋は通行できる」「バートでは点検車両を走らせているが、1時間から1時間半かかる。オークランド側には代替バスのサービスがある」「はずれた受話器は元に戻さないと復旧が遅れる。電話帳の初めに、地震のときの心得がまとめてある。余震があるかもしれないから、切り取って持っているといい。使用量が異常に増えているので、電話がかかりにくい場合がある」「サンフランシスコ・オークランド間のフェリーは無料。ベイブリッジは数日間閉鎖」「ヘイワード空港、サンホセ空港、オークランド空港の滑走路2本は使える」「交通信号が消えており、交差点はきわめて危ない」「聴取者は家にいてほしい」「赤十字がマリーナ中学校に避難所を設営している。今夜家に帰れない人たちがサンフランシスコ市内に約26万人いる。この人たちに食べものを提供する救援所をいくつかつくる予定」

KCBS局は、このような災害情報をコマーシャル抜きで84時間にわたり放送し続けた。

【震災時のラジオ放送】この2時間のテープの中でも、「パークレーの火災」「サイプレスの2階建て高速道路の崩壊」「ベイブリッジの落下」という大きな災害はヘリコプターからレポートされている。大きな装置は大きな災害しか探せない。テレビの場合、災害らしい絵がないことには、災害のニュースにならない。

それに比べ、ラジオの場合には、ひとりの記者と1つの携帯電話、ひとりの聴取者と1つの受話器が伝えてくる、ごく身のまわりの状況を、キャスターがつないでゆくだけで臨場感にあふれたニュース番組ができあがる。そして、情報を送る側と放送を聴く側が「恐かった」「すごかった」という気持ちを共有しながら、決して壊滅的な地震ではなかったというマクロなイメージをかたちづくられてゆく。

この種の報道では、記者や聴取者からのレポートをつないでゆくアンカーパーソンの責任は大きい。次々と飛び込んでくる新しい情報にきわめて的確に対応しながら、「私も恐かった」と個人を感じさせるコメントをさりげなく入れる、女性キャスターの知性とパーソナリティーには、強い感銘を受けた。